

だいや川通信

今市の水を守る市民の会

第55号
2023年9月6日(水)

若葉に道を照らされて

4月29日(土) ゆったりウォーク

室瀬・室瀬行川を歩く

今年の桜の開花は例年にも増して早かった。下見に赴いた3月30日、室瀬磐裂神社の本殿に向かう階段両側には空を独り占めするように咲き溢れる桜。呼吸する事も忘れてしまうほどの見事な花だった。そこから水田に向かう傾斜(なだり)にはカタクリの名残りが…。例幣使街道からほんの少し西側に入った室瀬はクルマの走行音も遮断され、水田が人々の暮らしを包み込んでくれている土地。春の光を懸命に捉えようとしている芽吹いたばかりの草達の色がやさしかった。

今回のコースは室瀬磐裂神社を出発して西側に向かい、分水嶺を越えて室瀬行川沿いを歩いたのち、ファミテック明神近くの古道に入って出発点に戻る約6キロのコース。4月29日、参加者10人。ゆったり・のんびり、足に加えて口の方も達者に動かしながら、光りやさしい道を歩いてくることができた。当日の様子は参加者のひとりである森田孝子さんから貴重な感想をいただいたので、ぜひご覧いただきたい。加えて、20種に及ぶ植物が道端で発見できた。短時間でこれほど見つかるとは、この土地はきっと植物にも生きやすい所なのだろう。植物に詳しい森田さんのお力によるもので、たいへん有難いことだった。

金沢山

室瀬行川橋が眼下に見える所で上流の左側に目を向けると、杉群の間に広葉樹の茂る山がある。これが金沢山で、今は静かに時を刻んでいる。橋を渡って上流に向かう県道70号はこの山極を走っている。金沢山には以前からの個人的思いもあり、今回のコースに選んだ理由を少々紹介させていただきたいと思う。

当会の前身である「今市の水を考える会」(以下「考える会」)。代表の福田健彦氏と会員の狐塚昭二氏から、昭和24年暮の今市地震の震源地がこの山であったことを会の勉強会で教えていただいた。お二人とも地震を直接体験されていて市の職員でもあったことから、地震の持つエネルギーの強さを詳しく語ってくださった。会の発足が平成6年(1994年)、当時は南摩ダム構想に連なる行川ダムが計画されており、大谷川扇状地を横断する導水管工事やダム建設にかかわる地下の断層の動きなど、懸念される問題点を「考える会」が率先し

て情報発信していった時期だった。その後、「考える会」を含め、県内のいくつもの団体が合意して平成9年(1997年)に「思川開発事業を考える流域の会」を誕生させた。その会が平成10年に【真の文明は川を荒らさず】というブックレット(随想社)を発行。その中に、嫁いで間もなく室瀬行川の自宅で地震に遭遇した大門シゲさんという方の貴重な体験が同会の葛谷理子さんによって記録されている。その頃、私もシゲさんご本人にお会いしていたこともあり、地震当時の状況を想像しながら、いつか周辺を探索したいという思いを温め続けてきたのがこのウォークにつながった。

今回、室瀬行川を歩くにあたり集合場所の室瀬磐裂神社に隣接する公民館の駐車場をお借りするため区長さんに連絡を取ったところ、なんとシゲさんのご子息である大門 孝氏だった。97歳になる母上様は現在もお元気にお過ごしと伺い、たいへん嬉しく思った。後日、同所の室瀬行川橋で行なった「川むしたんけん隊」でも、大門氏から貴重なご指示をいただいたことたいへん有難く、世のつながりの不思議さを感じ入った春だった。

不思議な山達

今回の金沢山と、一昨年秋に歩いた長畑の岩鼻山は地理的にはとても近く、背中合わせになっているようにも思える。当会の手塚さんによると、金沢山からは火成岩である流紋岩が、岩鼻山からは堆積岩であるチャートが見つかっているという。どちらの山が先に形を成したのか、門外漢の私にはよく理解できないが、それぞれの地から鉱石が掘り出されていたと住民の方から聞いているので、それも山の成り立ちと深い関係があるのかもしれない。

大谷川よりも行川の方が川としては先に形作られたと、かつて教えられた。人間が出現してくるのはずっとずっと後のことだが、時には私達の、この今市の太古の姿をいろいろ想像してみるのも面白い。ゆったりウォークを通して、まだまだ「不思議」を見つけたい。

目次:

若葉に道を照らされて ゆったりウォーク	1
	2
御用心 ショック・ドクトリン	3
川むしたんけん隊 室瀬行川橋	4
活動報告	4

定例会のお知らせ

毎月・第4金曜日

午後1時～2時

参加希望の方は会場・日時をお問い合わせください。

◆ ご協力お願い

毎月11日はイオンの「イエローシートキャンペーン」日です。半年に一度、シート合計金額の1%が登録団体にカードで寄贈されます。当会も登録しています。毎月11日のお買い物時には、「今市の水を守る市民の会」のボックスにシートを入れてくださるようご協力お願いします。(印刷用紙、プリンタインクなど)当会の活動に必要な品物を購入させていただきます。

ゆったりウォーク
室瀬行川橋の手前にて
行川と金沢山(左)を眺める



鎌倉街道

昨年春のウォークにて板橋から明神にかけて歩いた鎌倉街道。その続きと思しき道が室瀬地区にも残っている。杉と広葉樹が混在する中を伸びる一本の古い道。近くを日光宇都宮道路が走っているのだが、その音は全く聞こえず、冬を越した枯葉の積もった道は足を優しく支えてくれる。足元に届く木漏れ日、しっとりとした空気に包まれての古道は、日常の諸々を忘れさせてくれる癒しの道だった。

ご協力に感謝

当会の「ゆったりウォーク」は観光地には行かないことを信条としている。普段の息遣いが直接伝わってくる場所を選んでいるのも、住民の方から集落の歴史や地理など、その土地ならではの話を直接伺いたいからだ。

鎌倉時代よりもっと遡る世には、勝道上人が日光を目指して歩いた道がこの行川沿いだったことなど、私の様な移住者に

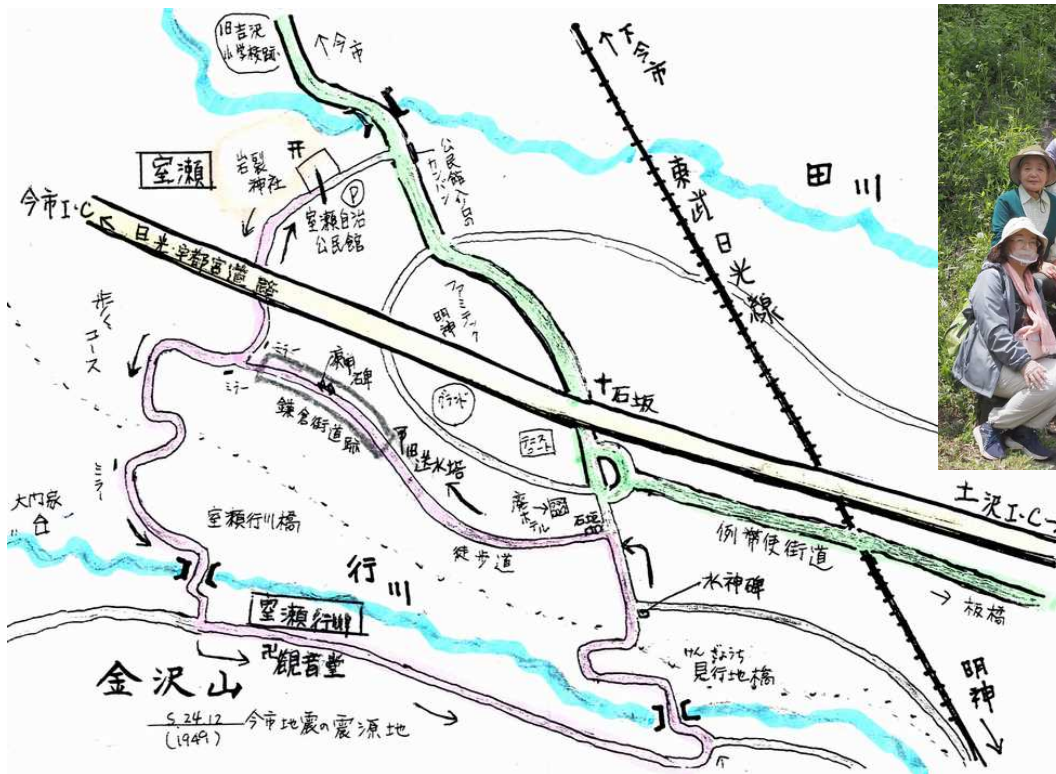
は初めて知るもの多く、古くからの伝えを今に残していただける旧今市市はウォークを経て愛着を持つ場所が増えた。今回も事前に次の方々から貴重なお話やご奉仕をいただき、ウォークの中身を濃くすることができた。誌面を借りて御礼申し上げたい。

① 室瀬行川集落の観世音堂と今回のコース全般についてのご案内 — 現地の福田功男氏・ふみえ様ご夫妻 より。

② 行川は以前はもっと西寄りの流れていた。室瀬行川集落の近くにはお不動様の祠があり、毎年正月明けにはお札を納める慣わしが続いている。祠の近くには鉱石を採掘した跡が残っている。— 福田 洋氏より。

③ 集合場所の公民館駐車場周辺を事前に草刈りして下さったのは、ご近所の青木久男氏でした。

皆さま、たいへんありがとうございました。心に残るウォークを行うことができました。
(塚崎 庸子)



↓ 室瀬行川橋近くの観音堂



①



④



⑦

春の光を受けとめて

「春のゆったりウォーク・室瀬地区を歩く」ではたいへんお世話になりました。かねてよりお参りしたいと思っておりました観世音堂に参ることができ、また沢山の花にも出会えました。深い緑の中に災害の記憶を抱く金沢山を仰ぎ見ながら、春の田を潤す行川の流れを楽しんだり、杉木立の中に名残りをとどめる古道を歩いたり、学び多い豊かな時間でした。

室瀬岩裂神社の満開の「ときわまんさく」に見送られてスタートしたウォーク。室瀬行川橋から見行地橋を経て一巡した約6キロメートルの行程では、古からの自然の営みや地域に生きる人々の歴史を学ばせていただきました。麓の民家を呑みこみながら崩れ落ちたという今市地震震源地の金沢山。70余年を経て滴るみどりに覆われた山容からは時の移ろいを感じ、道々、可憐な姿を見せる20数種の花々に心癒されました。行川の水辺に祀られた水神様の古い祠では手を合わせ、豊かな実りを願いました。

ウォークの終盤、杉林の中に残る鎌倉街道と思しき踏跡を軽やかに走り来る若者と出会った時は、鎧兜に身を包みこの道を駆け抜けた若武者もあつたらうと、遠い昔に思いを馳せました。草原の中に出そろった山菜を見つけて歓声を上げたり、今年初めてのツバメの巣作りに出会ったり、沢山の発見と感動を頂いた1日でした。有難うございました。

「ゆったりウォーク」にて出会った花

- ① ときわ(常盤)まんさく ② おとこようぞめ ③ 車みずき ④ ぼぼー ⑤ きんらん ⑥ ぎんらん ⑦ 山吹草 ⑧ 浦島草 ⑨ まむし草(てんなんしょう・天南星) ⑩ きらん草(地獄の釜の蓋) ⑪ たちしおで(山のあすばら) ⑫ うすばさいしん ⑬ いちりん草 ⑭ ちごゆり ⑮ かきどおし ⑯ ほうちやく草 ⑰ 鳴子ゆり(アマドコロに似ている。茎に角なし。鳴子のように花梗に3~5花をつける) ⑱ あまどころ ⑲ しゃが ⑳ すみれ7数種
(森田 孝子)

御用心！…「ショック・ドクトリン」

日本版・世界版

「ショック・ドクトリン」という言葉をご存知だろうか？NHK Eテレの「100分de名著」という番組で6月に紹介された本①の題名である。著者ナオミ・クラインはカナダ出身のジャーナリスト。この番組のテキスト②を購入して読んでみた。グローバリズムの陰の部分の告発する原著の要旨を丁寧に解説してあって参考になった。②の著者、国際ジャーナリストの堤さんにはショック・ドクトリンに関して新著③もある。紙面の都合もあり、テキスト②の上っ面を撫でる程度の紹介で恐縮だが、筆を執ってみた。

まずショックとは精神的衝撃とか、突発的大事件。ドクトリンは学説、理論、政策といった意味で、一般には「惨事便乗型資本主義」などと訳されている。

この手法を思いついたのは、のちにノーベル賞を受賞するシカゴ大学の経済学者ミルトン・フリードマン教授。当時のアメリカの経済政策は金持ちの独り占めを許さず、所得は公正に再分配して労働者を守るという「ケインズ主義」が主流だった。フリードマンはこれとは真逆の考え方、政府の市場への介入を最小限にする新自由主義（「民営化」「規制緩和」「社会保障削減」の三大政策）の経済思想の持ち主だった。

当時（20世紀中頃）は米中冷戦時代。アメリカ中央情報局（CIA）は共産中国の捕虜洗脳法を念頭に極めて残酷な「捕虜拷問マニュアル」を作成した。まずターゲット（捕虜）の感覚を強制的に遮断（例えば真っ暗な部屋に何日か放置）し、さらに心身を拷問することで精神を麻痺させて、捕虜の人格を白紙に近いものにする。その段階で新しい思想を提示すると、捕虜はその思想を従順に受け入れ、新しい人格に作り替えられてしまうという。

フリードマンは、「このターゲットを個人でなく、国家全体にして実行したらどうだろう？そして破壊した後に、理想の経済システム、政策と入れ替えるのだ。」と考えた（②17～18頁要旨）。言うなれば、国家や国民全体を拷問状態に置くという、根本的に不遜な発想だ。

この理論は自由に好きなだけ儲けたいと願う、銀行家や多国籍企業、投資家たちの一派から強い支持を得るようになり、早速同教授とシカゴ大学経済学部には財界からの惜しみない資金が注がれるようになる。

しかし、さすがにこの手法をケインズ経済学の政策が主流のアメリカでやるわけに行かず、先に外国で実証実験することに。選ばれたのはチリ。アジェンデ左派政権が誕生すると、CIA工作員とシカゴ大学出身の新自由主義思想を叩き込まれた政府高官や政治家たちが示し合わせてピノチェト将軍に軍事クーデターを起こさせ、反対派は容赦なく弾圧。公開で虐殺、拷問。国民は恐怖とショックで思考停止。そのすきに新政策を導入し、大成功に導いた。ショック・ドクトリンはここで確立したという。

まとめてみると、「①ショックを起こす。②政府とマスコミが恐怖をあおる。③国民がショックで思考停止。④シカゴ学派の息のかかった政府が過激な新自由主義政策を導

入。⑤多国籍企業と外資の投資家たちが国と国民の資産を略奪する。」（堤著②43頁要旨）

チリでの実験の後、フリードマン教授のこの「強欲略奪手法」は各国の富を食い尽くして行く。いくつか例を挙げておくと、旧ソ連邦崩壊（1991年）、韓国通貨危機（1998年）、米同時多発テロ（2001年）、イラク戦争（2003年）、スマトラ島沖地震（2004年）、米ハリケーン・カトリーナ（2005年）…日本でも特に小泉純一郎政権（郵政民営化・2007年）以降何度も使われてきている。

原著①が出て16年。ショック・ドクトリンはさらに拡大、深化しつつある。例えば2001年の9.11同時多発テロでは、「テロとの戦い」の名目で自国をいつまでも緊急事態下というショック状態におけるようになった。これによってテロ対策の名目で国民監視は合法化し（愛国法）、軍事産業、民間軍事会社、警察、諜報機関、セキュリティ産業などは毎年滞ることなく税金が投入される、安定した巨大利権を手に入れている。（堤著③63頁）

こうしたことから、GAF（アメリカ大手IT企業群）やBATX（中国大手IT企業群）のような極めて危険な仕掛人も登場してきた。また惨事も気候変動や金融危機、新型コロナ・パンデミックなど、地球規模のものになってきたことで、ターゲットも全世界の国民に拡大している。ここでは現在進行中のパンデミックに便乗したショック・ドクトリン（詳しくは堤著③第2章）について少し触れて小論を閉じたい。

① 新型コロナパンデミックが始まった2020年3～12月、億万長者（上位1%）たちは資産を約100兆円拡大、特にGAFを筆頭にビッグテック企業は過去最高の売り上げを達成。その一方で、（日本では）中小企業16万3735社が営業停止に追い込まれ、18歳から23歳の若年層の間でうつ病が蔓延し、家庭内暴力や虐待、自殺が急激に拡大した。（堤著③ 48頁）

② WHO（世界保健機構）は、これまでは加盟国に対して、単なるアドバイスとしての勧告しか出せなかったのを法的強制力のある、「命令」を出せる権限を自らに与える「パンデミック条約」の草案を2023年2月に発表した。同機構に与えられる権限は以下のようなもの。次回のパンデミックの決定・ロックダウンの指示・監視する権力の保持・治療法の決定・ワクチン接種の義務化・ワクチンの配布と管理・感染症の治療方法の決定…等々。

現在の国際法の下では、こうした国際条約は各国の法律や憲法の上に位置する。たとえ、ある国の国民の人権や自由が失われたとしても命に係わるパンデミックという緊急事態下では国は手を出せない。

（2023.8.31 文責・森）

参考図書

- ①ナオミ・クライン著「ショック・ドクトリン（上）（下）
—惨事便乗型資本主義の正体を暴く—
（岩波書店刊 2011年）
- ②100分de名著 NHKテキスト「ショック・ドクトリン」（2023年）
- ③堤未果著「堤未果のショック・ドクトリン」
（幻冬舎新書2023年）

3月24日(金) 定例会
3月30日(木) ウォーク下見
4月28日(金) 定例会
4月29日(土) ゆったりウォーク(室瀬・室瀬行川を歩く)
5月26日(金) 定例会
6月23日(金) 定例会
6月24日(土) 川むしたんけん隊(室瀬行川橋の少し下流)
7月28日(金) 定例会

活動報告 2023年

だいや川通信
第55号



郵便振替口座 00140-4-535550
〒321-1102 日光市板橋1732-1 森方
今市の水を守る市民の会
0288-27-2183 (8時~17時: 森)
0288-26-3324 (17時~21時: 塚崎)
<http://www.somesing.net/daiyagawa/>

川むしたんけん隊@行川 室瀬行川橋にて 《NPO法人 なんとなくのにな》と共同開催

コロナ禍によりしばらく中断していた「川むしたんけん隊」を6月24日(土)、「NPOなんとなくのにな」と共同開催にて4年ぶりに行うことができました。場所は春に「ゆったりウォーク」で歩いた室瀬行川橋の下流です。

行川での「川むし」は、これまで上流から下流に向けて、落合橋・千本木行川橋・見行地橋・中井橋・上小倉橋 と行ってきました。今回は6番目の調査場所です。川は同じでも、それぞれの場所・季節・その年によって水生生物の種類や数は変化があり、そのたび新しい発見に出会うのが楽しみです。

梅雨真っ最中でしたが、当日は朝から晴れ間も見え、9時30分から皆さんにしっかり観察してもらう予定でした。しかし10時半ころから本降りとなり、やむなく途中で切り上げました。短時間にもかかわらず、川むし数は想像していたより多く、本来の調査時間であったらもっとたくさん見つかったかもしれません。

保護者・子ども合わせて12名で生き物調べをした記録:

6月24日(土) 午前9時30分 うす曇り 気温 23℃、水温 18℃

水の流速 川岸 40cm/秒 川の中央 50cm/秒

環境省の指定生物【 】内は見つかった生き物の数

水質階級Ⅰ(きれいな水): ヘビトンボ【7】、カワゲラ類【4】、
ヒラタカゲロウ類【3】、ヤマトビケラ【1】

水質階級Ⅱ(ややきれいな水): カワニナ【4】、
コオニヤンマのヤゴ【8】

水質階級Ⅲ(きたない水)に棲む指定生物: いない

水質階級Ⅳ(とてもきたない水)に棲む指定生物: いない

その他、見つけた生き物

チラカゲロウ、モンカゲロウ、ヒゲナガカワトビケラ

トンボ(ヤゴ): オニヤンマ、サナエトンボ、コヤマトンボ

トンボ(成虫): ミヤマカワトンボ 魚: アブラハヤ、カジカ

きれいな水にすむ虫の数がとても多く、また、指標生物以外の生き物もたくさん見付き、彼らにとってもすみやすい場所が行川です。前週の雨で流されてしまった虫も多かったと考えられ、生きものを基軸にすればこの場所の水質は『きれいな水』と言えます。日光に住む子どもたちにはもっともっと川むしを知ってもらいたい。そして川にすむ生きもの達を通して環境を見つめる機会を今後も続けていきたいと思えます。

今回の活動でも地元の大門孝氏・福田功男氏並びにご長男様にたいへんお世話になりました。ありがとうございました。(塚崎)



上: はじめに、「川むし」採取について説明を聞きました。

下: いつもより水量が多いかな? 流速を測っています。



下: 10時半ごろ、雨が落ちてきたので説明に切り替え、採取した川むしを分類、個体数を数えました。



編集後記

「科学的」というのは物事を明らかにしようとする方法のひとつ。必要な資料(測定値、参考文献)が明示され、結論に至る過程が説明され、思考の展開をたどることができなければなりません。では「事故後の原発から出てくる放射能を含んだ水を海に流してもOKなのか?」という問題を「科学的」に解くことができるのでしょうか。放射線や放射能発見から100年余、生物への影響についての知識も経験も不足しています。そこで放射線量については「これくらいまでは我慢しよう」という参考値を定め、それをとりあえずの「基準」としているのです。その値も新しいデータにより、被ばくを減らす方向に何度か引き下げられています。「今は仕方ない」と思う人もいれば、「がまんできない」という人もいます。あたりまえのことです。海洋放出に反対する団体に対して「科学者」を自認する人が「あなたたちと違って私たちは科学的に判断している」と答えたそうです。原発事故後そんな乱暴な言い方が目立ってきました。トリチウム水については海洋放出以外の対応も可能との意見もあります。ほんとうに「海に流す」ことが「科学的」に正しい答えなのか、なぜこれほどの反対を押しつけて強行するのか。粘り強い対話と思考を続けることが「科学的」態度ではと思います。(T)